

平成 28 年 2 月 13 日（土）、大妻女子大学において、第 43 回関東・東北ブロック研究会が開催された。39 人（申込 40 人）が出席し、山田ズーニー先生の基調講演をはじめ研究発表、バズセッションなど活発な意見交換が行われ、充実したブロック研究会の一日であった。

総会あいさつ

さらに進展する情報技術の世界に生きる人間に伝えること

関東・東北ブロック研究会リーダー
高橋 真知子（常磐短期大学）

昨年は、情報技術を駆使した人口知能：AI が、人間の仕事の多くを奪っていく時代がすぐそこに来ているということをお話しました。



本日は、情報技術が金融サー

ビスを変えようとしている「フィンテック：Financial technology」を取り上げたいと思います。フィンテックとは、一般のインターネット事業者が IT 技術を駆使して融資・投資などの金融サービスを行なうもので、欧米諸国では年々急増しています。後れを取った日本のメガバンクのトップは、「銀行が消えるかもしれない。少なくとも、その業務形態は変わらざるを得ないだろう」と危機感を募らせています。

技術の進展は、私たちに様々な恩恵を与えてくれます。一方、私たちの学生は、産業界の大変革に間違いなく遭遇するでしょう。現在の知識・技術を修得させることは必須ですが、その多くは瞬間に陳腐化します。その時、どのように自らを変化させていかなければならないかを伝えていかなければ

ならないのではないのでしょうか。

講演

「書く人を育てる」

文書表現・コミュニケーション
インストラクター
山田ズーニー

今年度研究会の基調講演は講師として山田ズーニー先生をお招きし「書く人を育てる～言葉の産婆の表現教育～」というテーマでご講演をいただきました。

山田ズーニー先生はベネッセ進研ゼミの小論文編集長として 16 年間「高校生の書く力」に尽力されたのち独立され、文章表現・コミュニケーションインストラクターとして多数企業や慶応大学をはじめ多くの大学で講座やワークショップを開催し、文章表現力・コミュニケーション力の育成をされています。そのワークショップでは参加者が想いを表現するさまがまるで言葉をお腹から生みあげるような感動があるため「言葉の産婆」とも呼ばれていらっしゃるということです。

ご講演は「この講演では言葉の産婆の表現教育と題して書く力を育てる秘訣を持って帰っていただきたい。」というところから始まりました。

そして「宇宙人発見のニュース、あなたは何で（どの媒体で）言われたら信じますか？」という問いが

投げかけられました。その選択肢として東スポ(スポーツ新聞)、週刊文春、NHK の『7 時のニュース』が挙げられ、会場で多くの挙手があったのは、NHK でした。「まったく同じことを言っているのに、なぜ私たちは信じたり信じなかったりするのでしょうか。このことから分かるのは、人に自分の話を聞いてもらいたいなら“メディア力”、つまり自分の信頼性を高めることが重要だということです」。

このメディア力をはじめとしてコミュニケーションが通じるための7つの要件を挙げられました。

- ① 自分にメディア力があるか - 相手から自分はどうか見られているか？
- ② 意見があるか - 自分が言いたいことは何か？
- ③ 言っていることに論拠はあるのか - なぜそう言えるのか？
- ④ 目指す結果はなにか - どんな結果を出したいか？
- ⑤ 自分の根本思想はなにか - 自分の根っこにある思いはなにか？
- ⑥ 論点はどこか - 自分の問題意識はどこに向かっているのか？
- ⑦ 相手にとってどのような意味を持つか - 相手の立場から見たら、この話は何なのか？

この中でも最も大切なものは書き手の根っこにある思い、価値観という根本思想で「根本思想と言葉が一致すると読み手に響く文章となります。書く力をつけるには根本思想を表現できるように導くこと。考える力を鍛えること。この2つをセットで教えなくてはなりません。」と自分の根本思想を引き出すこと、そして自分の頭で考えることができることの重要性について話されました。

自分の頭で考える道具として問いがあり、自分に問いかけ、自分と交信し、自分の心の奥底にある言いたいことをひっぱり出すこと、これが「考える」ことであると。

そして、考える方法を身につけるため行われるワークショップは3つの基礎で成り立っているとのこと

です。

1つは自分の思いを言葉にする。自分の自分と通じること

2つ目は相手に伝わる文章を書く。相手の思い、相手と自分の関係性、相手から見た自分をとらえ、伝えたいことを確実に相手に伝えるトレーニングをすること

3つ目は不特定多数が存在する社会でいかに自分の伝えたい思いを伝えて協力者を集めることができるかということ

このワークショップを経験することで参加者は自分が心から本当に書きたかったことが書け、かつ、それが読み手の心を打ち、揺さぶる文章が書けるようになったと話されました。そして、最後に「あなたには書く力がある。これを伝えに来た。」と言われ講演が終わりました。

熱意を込めてお話をされる様子に引き込まれながら文章を書くこととはこのようなことなのだと思います。ただ、ワークショップを経験することで得られる自分の根本思想を掘り下げることや共感、揺さぶられる思いが実感できなかったは心残りでした。



助成研究発表

テーマ：「中期キャリアを見越しての就業前キャリア教育の研究Ⅱ」

斎藤裕美（多摩大学）佐藤美津子（多摩大学）



長谷川美千留（八戸大学）田中敬子（コムネット）

学生が中小企業に就職し、初職を 3 年以内に

退職し、3 人に 1 人が奨学金という負債を抱えて社会に出て行くことを前提に、中期キャリアを見越しての大学でのキャリア教育はどのようにあるべきかの研究を行った。中小企業の海外展開の重要な課題は、必要な人材が不足していることである。また社員が離退職を繰り返す理由は、「キャリアの停滞」と「責任回避」であり、社員が組織内で主体的に長期的な視点を持ち自己の将来像を描くことができず、自己のキャリアへの関心の低下や将来キャリアへの不透明感を抱くためである。



以上を鑑み、大学においては学生に自分の専門や強みは何かを自ら考え、より良い選択ができるキャリア構築力を身につけさせること、武器としての労働法等の知識を身につける教育をすること、さらに債務を抱えた上でのキャリア・プランを常に意識する習慣を身につける教育をすることなども加えたキャリア教育プログラムを開発することが求められている。

個人研究発表

テーマ：「高大連携に関する一考察—考察・簿記会計教育を中心として」

長谷川美千留（八戸大学）

1999 年中教審の答申『初等中等教育と高等教育との接続について』ならびに 2005 年『高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について』によれば、高大連携の目的は、高校生に大学レベルの教育研究に触れる機会を提供することである。しかし、専門高校における高大連携では、と



とかく検定合格に終了してしまう危険性がある。商業高校の減少、人材育成モデルの変化、教育環境の変化など。大学教員側も高校の現状を理解することが重要である。その上で、高大連携の本来の目的から脱線しないよう、検定を材料にしながらも理論に重点を置いた教育等の努力を続けるべきである。また、高校教員側も大学の人的資源を現場の短期的な手段としてのみ利用するのではなく、高度職業会計人への道筋となる理論や教養教育の重要性に重点を置いたプログラムにも一層の理解を示してもらいたい。この相互理解のためには、高大連携の原点に帰り、両者が正しく理解することである。



実践事例報告 1

テーマ：「ゼミナールを通じた人材育成の
試み～社会変革とビジネス創造
への挑戦」

安齋 徹（群馬県立女子大学）



女性の活躍を推進するためには、社会や企業での実践や啓発のみならず、教育現場での取り

組みも重要であり、とりわけ女子大学が果たすべき役割も大きい。群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の社会デザイン論ゼミナールでは、負荷（ストレッチ・アサインメント）をかけつつ、きめ細かな工夫（案件ごと輪番でのリーダー制や毎月の個人面接、ビジネス・マナーの徹底など）を凝らすことで確かな成果（地域の課題解決への取り組みや様々な学外コンテストでの入賞）を収めている。客観性を担保するために全国の文系ゼミナールに所属する大学3年生200名を対象に「大学3年のゼミナール活動に関する意識調査」を実施したが、当該ゼミナールは成長実感や社会人基礎力など様々な指標で全国平均を凌駕していた。中央教育審議会が推奨するアクティブ・ラーニングも、教員と学生の距離感が近いゼミナールでは実践が容易であり、ゼミナール教育の持つ人材育成機能にもっと着目すべきである。

実践事例報告 2

テーマ：「福島県伊達市霊山町「掛田商店街」と連携した地域活性化事業について」

木村信綱（福島学院大学短期大学）

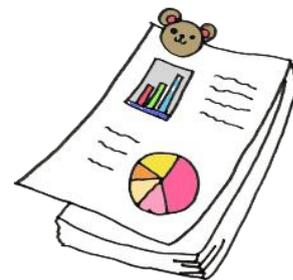
市町村合併によって活力を失いつつある「旧中心市街地」の活性化を目指す福島県伊達市の補助事業「伊達マルシェ～かけだ・まちなか市～」への参加について報告した。

四ヶ年計画のうち、二年目より福島学院大学の学生が



関わっている。当初は情報ビジネス科学生のグラフィックデザインのスキルを発揮したチラシ・ポスター制作のみの予定であったが、食物栄養科学生を巻き込んだご当地メニュー開発、福祉心理学科学生を巻き込んだ子供向けワークショップ企画など、徐々に内容を拡げてきた。

上記のような連携事業は、授業とは別に、案件ごとに有志を募って実施している。学生にとっては単位や時給が得られない活動であるが、授業以上に熱心に取り組む姿が見られる。このことについて、指導する立場の教員が「トータル・リワード（非金銭的報酬）」の考え方を学ぶことで、学生の地域連携へのモチベーション向上が期待できるのではないかと考える。



バスセッション

テーマ：「自己表現」「キャリア教育」
「高大連携」「地域連携」「アクティ
部・ラーニング」「就職支援」

テーマごとにグループに分かれ、活発なバスセッションが行われました。

参加者は、学校での取り組みの成功例や課題などを率直に語り合い、情報共有をはかりながら、有意義な意見交換の時間を過ごしました。



研究会を終えて

第 43 回関東・東北ブロック研究会実行委員長
齋藤裕美（多摩大学）

第 43 回日本ビジネス実務学会関東・東北ブロック研究会も、年度末のご多用中にも関わらず多くの方々にご参加頂き、無事に開催することができました。

今年度は基調講演に著名な方をお迎えし、より多くの方にご参加頂きたいということから、

山田ズーニー氏にお願いすることになりました。

講演者選びだけでなく終始ご助言下さったブロックリーダーの高橋眞知子先生、今回から開催校が大妻女子大学に変わり、会場準備等をお引き受け下さった岡田小夜子先生、数日前までの参加申込みにもご対応下さった大島武先生ほか運営委員の皆様には本当にお世話になりました。

実行委員長として準備不足な点多々あり、しかも残念ながら研究会当日は参加できませんでしたが、盛会の裡に研究会を終えることができましたのも、運営委員の皆様と当日ご参加下さった皆様のおかげと心から感謝しております。誠にありがとうございました。

関東・東北ブロック研究会リーダー
高橋 眞知子（常磐短期大学）

穏やかな早春の一日、新しい会場となった大妻女子大学のご協力で、第 43 回研究会を無事終了できましたことを心から感謝申し上げます。とりわけ、新しい発表者の方々と 8 名のビジターをお迎えし、参加者 39 名で開催できたことは、大変嬉しくありがたいことでした。

研究会では、説得力満点の熱のこもった基調講演・調査を基にした助成研究発表・実態に根差した報告や活気あふれる試みの報告・日頃の悩みや成功した指導方法などを率直に語り合い情報共有したバスセッションなど、充実した研究会を開催できましたことを心から感謝申し上げます。



お知らせ

1. 次回のブロック研究会は初めて福島の地で行うことにいたしました。東北の会員の皆さまにはぜひご参加いただけたらと思います。詳細は秋にご案内申し上げますので、よろしく願いいたします。

日程：2017 年 2 月 18 日（土）

場所：福島学院大学（駅前キャンパス）

編集後記

☆今回は初めて大妻女子大を会場として研究会が開催されました。とても明るく、きれいな校舎で開催された研究会はそれにふさわしく、若い先生方の意欲的な個人研究、実践事例報告を聴くことができました。研究会のリスタートを予感させる一日でした。会場を提供くださいました大妻女子大学の岡田先生ありがとうございました。（畠田）

☆毎年出席している割に運営委員としては 10 年ぶり位だったのですが、会場は新しくきれい！ かつ機能的で、曜日も土曜日に変更しましたし、何よりも若い先生方のご活躍を目の当たりにし、何から何までフレッシュな研究会でした。フレッシュと言えば来年はいよいよ東北でのブロック研究会です。2017 年 2 月 18 日（土）、どうか皆さま、今から日程の確保をよろしくお願い申し上げます！（宮田）